

第IV章 おわりに

1. 今後の展開について

本報では、特に、森林景観の特徴を把握する手法の開発に重点を置き、地域森林景観の個性を把握するための指標化の一環として、“テクスチャの規則性”、“テクスチャの形態の複雑さ”について取り上げたが、各地域の森林の外景観を定量化することで、地域森林景観の客観的な比較、分析が可能となることが分かった。

近年の国内林業の衰退とともに、人々が森林に対して求める役わりが変化してきており、それに伴い人々の森林に対する意識が高まってきている。その一方で、日本の国土面積の約3割を占める人工林の管理を、林業、およびそれに従事する一部の人々に依存することは難しくなっており、今後、森林の管理を適正におこなっていくための新たな森林管理の枠組みが必要となってきたことも事実である。それには、森林を木材の供給の場としてだけでなく、地域住民や都市生活者を含めた生活の場として認識し、管理につなげてゆくことが必要になると思われる。また今後は、森林景観を新たな森林管理の方法として捉えていく立場から、木材生産の結果として、現出する森林の景観をそのままに受け入れるだけでなく、特徴的な森林景観の形成自身を目的化し、その実現のための方策を検討したり、さらには地域の人々との歴史的なつながりを呈示することによって、地域住民による自分達の生活する地域に対する愛着を高め、地域の活性化に結びつけ展開していくことなども考えられる。

こうした生活の場として森林を扱っていく場合、森林景観のあり方に関する検討が不可欠であるが、森林景観を生活の場として捉える視点からの森林景観に関する知見のストックは、まだまだその歴史が浅く始まったばかりである。その一方で森林の変容は、近年ますます進んでいる。これは林業の不振や農山村の生活における周辺森林との関わりの希薄化により従来の地域森林景観を保つことが困難になってきたためである。そのため、地域らしさを支える森林景観の特徴が曖昧になり、地域の個性的景観が失われていくことが危惧される。それを防ぎ、地域森林景観を維持するためには、それを支えるための新たな仕組みの構築を急ぐことは勿論、まずは、適切な分析軸を用いて、それぞれの特徴がどこにあるのかについて明確にすることが必要であると考えられる。いずれにせよ、個性的で豊かな森林景観を形成するためには、まずは森林景観のどこに特徴があり、それがどのように形成されてきたのかを知ることから始める必要がある。そのためには、各地の森林景観の特徴を把握するための手法の開発と、それを支えてきた、地域ならではの森林との関わりに関する知見をストックしていく必要がある。今後、各地域の地域らしさを顕在化させるような森林管理のあり方について議論を深めていくためにも、地域個性の指標化についてもさらに掘り下げ、場合によってはさらに定量化し客観化していく必要があると考えている。

2. 今後の課題

また、本報では人々の生活の視点を重視し、中景域の森林の外景観を対象として、定量化の作業をおこなった。分析に際して、樹冠のおりなすテクスチャの大きさを統一するため、特に景観対象までの距離、および森林の林齢に関して、吉野・日田ともに可能な限り同質になるよう検討したが、正確に統一することは困難であった。景観対象までの距離が遠くなるほど、景観対象の画像中における単位面積あたりの樹冠数が増加するため、相対的にテクスチャの形についても複雑になると考えられ、実際、分析の結果においても視対象との距離が遠くなるにつれフラクタル次元が大きくなる傾向が見られた。また、距離や林齢だけでなく、林地の傾斜度などもその見えには関係しているものと考えられる。そのため、森林の外部景観に関してテクスチャの形について論じるためには、視距離、林齢、林地の傾斜度などについてのある一定の枠組みを作ることが必要であると考えられ、これらについては、今後の課題としたい。

また、樹木がおりなすテクスチャは、元来、太陽光と樹木の関係性が創出する淡い輪郭線情報に依っていること、また、規則性があるとはいえ、人為的に作られたテクスチャほどそのパターンは明瞭でないことなどから、画像の濃度だけから正確にその特徴を抽出することは難しいと考えられる。今後は、各地域における代表的な樹木の樹形をトレースするなどしてデータ化し、それらを複合的に組み合わせ、人為的にテクスチャ等の地域森林景観のモデル画像を作りだし、本報でおこなったような分析方法をおこなうことでさらに正確な比較、検討が可能になるものと考えられ、さらには個性化の指標を検討する上でも有効な手段になるものと考えている。

また、前述のように森林は多くの場合、地域の景観の背景となっており、ゲシュタルト心理学でいう「地」を形成している。そのため、森林の景観は人々に意識されにくい、全体としての印象には大きく影響しているものと考えられる。しかし、その関係性についてはいまだ不明確な点が多く、今後、地域森林景観に関する研究をおこなうにあたっては人間の官能評価との関係性について明らかにしておくことも必要であると考えている。本報においても、地域森林景観の特徴の指標化にあたっての一つの観点として、テクスチャの規則性や形態を取り上げたが、やはり今後、人間の官能評価との関係性が明らかになってはじめて、地域森林景観の保全、あるいは回復、創造などといった意思決定に寄与する有用な資料になり得ると考えている。

第V章 参考・引用文献

- 1) 下村彰男 (1999) : 地域森林景観試論 : 森林科学 27、20-25
- 2) 熊谷洋一ら (1998) : 新たなる森林管理システム構築のための視覚心理学的研究 : 平成9・10年度文部省科学研究補助金 (B) (2) 研究成果報告
- 3) 盛口平治 (1900) : 吉野林業法
- 4) 佐藤彌太郎 (1954) : 吉野林業概要
- 5) 土倉梅造 (1983) : 吉野林業全書
- 6) 上田正昭 (1990) : 吉野—悠久の風景
- 7) 菅原聰 (1996) : 森林—日本文化としての—
- 8) 奈良県「吉野林業」
- 9) 川上村森林組合 : 川上村の林業
- 10) 奈良県 : 奈良の林業 平成10年度
- 11) 奈良県 : 現存植生図 : 縮尺1:50000 大台ヶ原4、吉野山8、山上ヶ岳9
- 12) 森林総合研究所九州支所年報(1989) : 上中作次郎・田内裕之平成元年度
- 13) 熊本営林局(1957) : 九州国有林の展望
- 14) 林業振興地域整備計画制度研究会編(1991)山づくり、むらづくり、人づくり 150 選
- 15) 日本林業技術協会編 (1972) 林業技術史 第1巻地方林業編上
- 16) 三井秀樹 (1996) : フラクタル造形 : 鹿島出版会、p 29-40
- 17) 屋代雅充 (1980) : 景観におけるテクスチュアに関する研究、造園雑誌 44 (2)、102-108
- 18) 屋代雅充 (1992) : 景観計画手法の体系化、造園雑誌 56 (2)、146-153
- 19) 山岸良一・内田茂ら (1988) : 街路景観の<複雑さ>及び<秩序>に関する実験的研究、日本建築学会計画系論文集 384、27-34
- 20) 奥俊信 (1990) : 都市スカイラインの視覚形態的な複雑さについて、日本建築学会計画系論文集 412、61-71
- 21) 高安秀樹 (1992) : フラクタルとその応用、日本ファジ学会誌 4 (5)、798-805
- 22) 三橋弘宗 (1994) : 距離とテクスチュアの動態からみた景観計画、明治大学農学部緑地工学研究室 1993 年度卒業論文
- 23) 柴田滝也 (1999) : 街路景観の心理的効果のモデル化と画像検索システムへの応用 : 日本建築学会計画系論文集 515、297-304
- 24) 沈悦ら (1995) : 中国西湖の景観構成とその形成に関する研究 : 造園雑誌 58 (5) 157-160
- 25) 山口徹ら (1995) : 計量心理学的手法による商業・業務系建築物前面の景観評価に関する研究 : ランドスケープ研究 58 (5)、277-280
- 26) 有馬隆文 (1997) : 都市景観シミュレーションと景観評価に関する研究 (<http://www.arch.oita-u.ac.jp/a-kei/urban/arima/gaku01.html>)
- 27) 竹内稔ら (1995) : シークエンス景観と連続シーン景観の評価構造分析 : 日本建築学会計画

系論文集 475、119-128

- 28) 齋藤馨 (1985) : 写真による景観評価特性と既存評価モデルとの関連について : 造園雑誌
48 (5)、246-251
- 29) 辻 華欧利 (2000) : : 東京大学大学院修士論文